

石黒 怜 (学校教育課程・教科教育実践選修)

《序論》 研究の動機及び研究の目的・方法

著者は、大学入学からハンドボールを始めた。ハンドボールには、「走る」「跳ぶ」「投げる」「捕る」といったあらゆる運動の形態と、先行する運動と次の運動が融合する「運動の組合せ」や、次の運動を予測する「運動の先取り」などのたくさんの要素が含まれている。しかし、一般的に多くの人知っている競技ではないために、ハンドボールのできる環境が不足してしまうことが多い。そこで、ハンドボールに近い基礎ゲームなどのボールゲームを通して、体育の授業について考えたい。体育の授業を運動発達という視点から考えていくにあたって、園児期までの急速な運動発達と、9～12歳での子どもの発達の中でも最高潮を示すといわれている「最適学習期」の間にある小学校低学年の時期に興味を持った。そこで、その時期を重要視し、子どもたちがどのようにして「最適学習期」を迎えるべきか、「捕って投げる」といった個人的な運動の組合せなどはどのようにして発生していくのか、どう教えていけばいいのかという点について、理想像を見つけるためにこの研究を行いたい。

本研究では、秋田大学教育文化学部附属小学校の2年B組を対象とし、小学校低学年の子どもたちにとってどのような教材が良いのか、「捕って投げる」という点で、どういう「運動の先取り」をおこなっているのかなどを、印象分析を通して考察していくことを目的とした。その方法として、秋田大学教育文化学部附属小学校2年B組のハンドボールの授業実践での子どもたちの動きをビデオに収録し、日々の運動発達や、その時期の典型的な特性が現れているものを中心に、理想像に近い子どもとまだ程遠い子ども、間違った運動をしている子どもを比較しながら、なぜこのような差が生じるのか、そしてどう指導すべきかなどについて運動モルフォロギ的視点から考察する。

《本論》第1章 捕・投運動の特性論

スポーツ運動学において、モルフォロギ的考察法は最初の拠点として不可欠である。ここでのモルフォロギ的考察法は、実践に身をおいているスポーツ指導者に有用な認識を提供するものである。この方法を用いるにあたり、運動記述が必要である。運動記述は、単に運動を外面的に写真さながらに正確に写し取るだけでなく、同時に運動経過のある特徴を浮き彫りにして、説明するものである。さらに、そこで記述された運動経過を、客観的に捉えるためにマイネルの諸カテゴリーを用いる。諸カテゴリーとは、①運動の局面構造②運動のリズム③運動の伝導④運動の流動⑤運動の弾性⑥運動の先取り⑦運動の正確さ⑧運動の調和である。この諸カテゴリーの視点から見ることにより、その時に行った運動の出来栄が評価できるのである。

第2章 年齢別からみた捕・投運動の発達

投げるといった動作を最初に現すのは、ゼロ歳の終わりごろの放り出す運動である。3歳児になると、投運動の中で始めて全身を使った動きがみられるようになり、4～5歳児になると、直立からオーバーハンドで投げる時に、準備局面と主要局面がスムーズに結びついてくる。しかし、小学校低学年になっても最も良い運動の操作を示す子どもは少ない。また捕運動では、3歳前後で、はっきりと捕ろうとする構えが認められ、6歳児になると一般的に手だけで捕ることができるようになる。小学校低学年になると、一部の子どもは、中ぐらいのボールでも、からだから離して捕ることができるが、まだ、からだに着けて捕ったり、正確に投げてもらえないと捕り損ねる子どももいる。捕と投運動での組合せは、小学校入学間近に始まる。子どもは、捕と投の2つの運動形態をスムーズに結びつけようとする。つまり、ボールを捕る姿勢に、次に起こる投動作の構えを見ることができるのである。このことは、次の投動作をあらかじめ「先取り」しているということがいえるのである。

第3章 小学校低学年における典型例の印象分析

ここでは、秋田大学附属小学校2年B組の子どもたちに、「ボールを捕ってから、すぐに目標に向かって投げる」という運動課題を与え、捕・投運動の組合せについて印象分析した。分析の視点として、諸カテゴリーの中の「運動の局面構造」「運動の先取り」「運動の正確さ」を用いた。同じ課題を通して、手足の動きなどの習熟度から、はじめに運動の上手な子どもと、比較的運動を苦手としている子どもの2つに分け、それから、それぞれをさらに2つの大きなグループに分類した。その結果、運動の上手な子どもは、「ステップ型」「腕巻き込み型」に、比較的運動を苦手としている子どもは「静止型」「ステップ型」にそれぞれ分類できた。運動の上手な子どもは、捕動作の「終末局面」と投動作の「準備局面」との間に「局面融合」が生じ、運動を「先取り」する能力が発達している。また、経済的、合目的でスムーズな運動経過であるため、「正確さ」の高い捕・投運動の運動経過を見ることができた。これに対し、比較的運動を苦手としている子どもは、「局面構造」は途切れ途切れで、次に来る運動を「先取り」できず、経済的、合目的な運動経過は見ることができなかった。

《結論》

この年齢段階では、園児期からこの時期まで、積極的にボールに触れている子どもの運動発達と、あまり、ふれる機会の少ない子どもの運動発達に大きな差が生じていることがいえる。また、スムーズに運動を組合せるための「運動の先取り」などの能力が低く、捕・投運動における「局面融合」がないことが大きな特徴である。最適学習期を迎えるにあたり、ボールを使った運動ができる環境を増やし、それぞれの運動課題を考え、目標に沿ったより効果的な指導を行うことが必要である。そして、子どもたちが、自らの運動課題を考え、それを「動き」として現そうとするようになることが、子どもの運動において、大きな成長ができる最大の要素となるのである。

(引用・参考文献省略)